思春期・生きて在る日々

山本コウタロー

思春期・生きて在る日

山本コウタロー

朝日新聞社

山本コウタロー
1948年，東京生まれ。一橋大学社会学部在学中に，フォーク・グループ，ソルティー・シュガーで『走れコウタロー』の大ヒットを飛ばした。レコード・音楽界のほかに，深夜放送ＤＪをはじめ，ラジオ・テレビの世界でも活躍している。『燃えよエコトピアン』（晶文社），『自然な関係』（教育史料出版会）など著書も多い。

思春期・生きて在る日々

1986年4月30日　第1刷発行　　定価 980 円

著　者　山本コウタロー
発行者　川口　信行
印刷所　図書印刷株式会社
発行所　朝日新聞社　編集・図書編集室　販売・出版販売部
〒104 東京都中央区築地 5-3-2
電話　03-545-0131(代表)
振替　東京 0-1730

©KOUTARO YAMAMOTO 1986
ISBN 4-02-255515-7　Printed in Japan

人類の大きな年月のなかで
私であるのは私一人だけ
もちろん
あなたもあなただけ
だから
人は同じ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もくじ

コウタローの思春期　9

自意識の時代　10

父の背　受験　浪人生諸君　T先生の言葉　はじめての万年筆　誕生日　自意識の時代
18禁映画　デート　性体験

音楽との出会い　29

やぁまは、しろがねぇー　音楽の成績　音楽との出会い　初バンド・初ステージ　サッカーとギター　音楽仲間との出会い　意気消沈　ワリッド・メン　音楽の力

生きて在る日々　53

コウタローのフィーリング　57

TOKYO育ち・TOKYO暮らし　58

「自然」に降る雪、「街」に降る雪　僕の冬景色　ウラヤマシイ！　世田谷区の鈴木サン
「時のない国」はもうごめんだ！　「アジア会館」を知ってるかい？　アジア感覚の聖域に
幻滅　立田野のおはぎをほおばる「文化人」　新宿や…ああ、新宿や…　ああ……〝ざくろ〟
で灰かぐら　地下鉄銀座族のトポス　〝イイトモーッ！〟の声が虚しく聞こえるぞ　「文明
病死」直前の街

現代感覚　86
好いた仲　本屋さんに僕の欲しい本はなかった　白い霧の向こうに……　過激している女性たち　少女は厩戸王子になりたい　見られると興奮しちゃう〝日本〟　〝生命現象〟としての音楽を

コウタローのライフ・スタイル　105

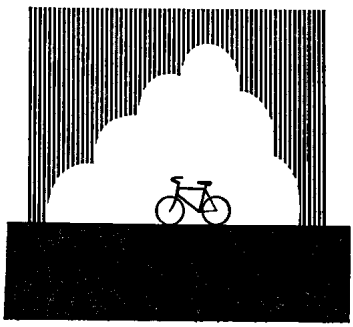
自然な関係で生きる　106
拝啓・明石陽一様　スノッぶりっ子たちへ「自然食」のお誘い　自然食と不自然食　ハーゲンダッツもいいけど……　エコトピア　やまめの家畜化　自然な関係ネットワーク　喫わない側の論理　結婚・夫婦・性
実践的住居空間学　130
〝住まい〟って何？　縁側からマイ・ルームへ　お仕着せのインテリアよ、さようなら　引っ越しこそ、整理のチャンス　食器はひと揃えで十分　バスルームの正しい在り方　人が生きている空間としてのリビングルーム　夜は暗くあってこそ夜　LA気分の掃除なら週に一回でOK　ほんものの「飲料水」　安全性の代償に開放性を失った玄関　ひとり暮らしは自立の基本　マイ・スペース＆マイ・ペース　生き物たちと空間を分けあう　「衣食住」から「住食衣」へ

コウタローのオピニオン　161
学校なんていらない　162
自立　職場参観　いじめ　アルバイト　脱学校　生活体験の場　共生　男の性　ウケる
若者症候群　感性を磨く　下宿生　人間らしさとフリー・スクール　ピーターパン症候群
管理社会の中で　193
管理された国民たち　Remember'83・12・18　社会に興味を持とう！　都市と「森の生活」　近接学と人間不適応症　C&C社会とメディア離人症　ハイ・テックからハイ・タッチへ「死」への関心の高まり
現代をさぐる　219
若者に我慢を強制してもシラケるだけ　メディア犯罪とプライヴァシー　マスコミ・ジャーナリズムとアイドル　21面相のリーダーが子どもでなぜ悪い？　ファンという名の女性タレントたち

装幀・和田　誠　本文イラスト・佐藤豊彦

思春期・生きて在る日々

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



コウタローの思春期

自意識の時代

――父の背

中学3年のときのことである。中3といえば、高校受験。1学期の終わりともなれば、いやでも進路の決定を迫られる。今から20年前でも、それは少しも変わらなかった。

私の父は、少しだけ教育パパであった。私を塾に押し込んだりはしなかったけれど、成績が悪いと、いつも私をしかった。中1のときなど、英語がこれでどうするんだと、頭をゴツンとやられたこともある。父は上智大学の英文学科卒であった。

中3の1学期、私の成績は良くなかった。父の私への期待からすれば、最悪の部類であった。担任の先生に呼ばれて、進路相談を終えた父と会うのは、だから私は嫌だった。頭ごなしに怒鳴られるか、それより前に平手打ちが飛んでくるか、どっちにしても覚悟はきめていた。どうせ、勉強しなかった私が悪いんですよ。

その日は土曜日だったろうか。

とにかく、夕方私は父の部屋をのぞき込んだ。父は、向こうをむいて、夕刊を読んでいた。「先生、何か言ってた?」。私はおそるおそる尋ねた。父は、夕刊から目を離さず、私に背を向けたまま答えた。

「ま、今くらいなら、どこかには入れそうだ、と」

やさしい声。父の背が、少し冷たく縮んだように見えた。父はあきらめたのだ。息子に賭けていた何かを。父の背が私にそう教えた。

私は、あきらめてほしくなかった。私は父の誇りの子でありたかった。大丈夫、何とかやってみるよ、お父さん! 突然、その夜から私は嫌いな勉強をし始めた。結果、第一志望校になんとか合格したのである。

思春期の感性は、百の言葉より、ひとつの身ぶりから、十分な意味を知ることがある。そして、一度足を踏み出せば、高い山さえも駆け上がるエネルギーだってあるのだ。

――受　験

大学入学は人生のゴールではない。結婚や就職と同様に、それは通過点に過ぎない。ところが、子供が受験だといって焦り、本人より緊張して、家中をプレッシャーで満たし、本人に必要以上の圧迫感を与える親がいる。

受験する当人が、この時期、いよいよ胸しめつけられるようになってくるのは仕方ない。少なくとも、彼あるいは彼女にとっては、1年の総決算。努力の結晶をすべてぶつけるべく、肩に力の入るのは致し方のないところだろう。受験生には、目の前の試験しか見えないのだ。

それを、人生のより豊かな経験者であり、より広い視野で子の将来を見るべき親たちが、一緒になって神社へお参りに行くとか、受験場にぴったりつきそうなんていうのは、どんなものだろう。

子供たちは、自らの決意にしたがって受験しているはずである。受験するのも、無論自分一人で、である。社会に出れば、もっと一人で立ち向かうべき試練は増え、思い悩むことも多くなる。

受験は、人間が結局は一人で人生を生きていくことを知る良い機会なのだ。しかし、一方では愛という言葉を隠れミノに、親が子供の自立のチャンスを遠ざけてしまう。

受験が通過点であるからには、そこに人生の最終的な成功、失敗の結論はない。受験は、努力をより広い結果に結びつけるための回答作りであり、物事をじっくり考えるための訓練期間であり、自分を知るための自問自答の場である。大学に入ってからだって——入らなくたって——人間はどんどん変わる。成長する気さえあれば、伸びる。

自分で考え、目標を決め、それに向かって努力すること、それが大切なのだ。2年の浪人を経て、大学に入った私が、受験時代に学んだと、今言えることは、その一点のみである。

——浪人生諸君

全国の〝浪人決定〟諸君、胸をはりましょう。私は浪人の味方です。私も浪人しました。2年もしました。そのうえ、現役で合格したガールフレンドにもふられるという、ふんだりけったりの18歳の春だったのです。

ところで、全国の浪人生諸君、あなたが落ちたのは、はっきりいって実力が無かったからです。体調もツキも実力のうち、過去を悔やむよりは、なぜ失敗したかの点検をしましょう。自分自身をもう一度とらえ直すのです。

あなたのご両親は、1年くらいなんでもないから、ガンバリなさいと、あなたに言うと思います。一方、あなたは花の青春時代の貴重な1年を奪われたようで、暗い気持ちになっている。浪人なんてカッコ悪いな、とね。

だから、思いきり悩みましょう。人生の行く末について、自分のなすべきことについて、どんどん悩みましょう。考えましょう。考えたり、自分一人で行動したりするのは、時間にゆとりのある若い皆さんの特権なんです。

日記もつけちゃいましょう。書くことは、思考の整理にはピッタリです。この浪人時代の徹底的な自己追求は、必ず将来のあなたの人生にプラスとなります。落ち込んで、またエネルギーを取り戻して、さらに新たな挑戦をする。この繰り返しみたいなもんですからね、この先も。

挫折体験は人間を成長させるといいます。人の心の痛みのわかる人間にするといいます。さらに、点数主義で人を評価せず、他の人々のあらゆる可能性を認められるようになれば、しめたもんです。

来春の合格のため、コツコツ努力するのは、もちろんでしょうが、と同時にこの1年を自己の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com